外文明と内世界

1．研究組織

研究代表者：西村　重夫（京都大学東南アジア研究センター・助教授）
研究分担者：河上　倫逸（京都大学大学院法学研究科・教授）
白石　昌也（横浜市立大学文理学部・教授）
横山　俊夫（京都大学人文科学研究所・助教授）
園田　英弘（国際日本文化研究センター・教授）
弘末　雅士（天理大学国際文化学部・助教授）

2．研究のねらい・目的

この研究班のねらいは、地域が何らかのまとまりをもって成立する力学を、社会科学者と人文科学者が共同で究明しようというところにある。

そこで前提とされているのはおよそあらゆる地域において次の二方向のベクトルが並存しているということである。つまり、一方で、ある地域をそれ自身の固有性によって他と区別し、これを完結した共同世界として形成しようというベクトル、すなわち「内世界」形成へ向かうベクトルがあり、他方で、いくつかの内世界と同質化・共通化・普遍化させようというもう一つのベクトル、すなわち「外文明」がある。ある地域の固有性を把握するということは、内世界と外文明の間のこの連関の様相と相互作用の力学を解明することにほかならない。しかも肝心なことは、これを「外」の挑戦に対する「内」の応戦という視点では毛頭なく、内世界それ自身の主体的営為という視点において捉えることである。「外」はいつも「内」の問題として表われる。「外」は「内」に受容され「内」において定位されていく。このダイナミクスを研究主題とする。

次にわれわれの研究対象は、東南アジアの精神世界である。別言すれば東南アジア世界を物理空間・社会空間・意味空間の三つに分けた際の意味空間が研究対象である。ここに意味空間とはそこに住まう人々によって描き出された世界の姿かたちでありそのイメージである、ということができる。人々は時間についてさらに空間についてどのように了解するのか、その「了解の構造」とはどのようなものなのか、また、人々が共通にあるいは個別的に得ていく日々の経験、それがありきたりの経験であれ、尋常ならざる経験であれ、それに対して、どのようなかたちを与えるのか、そこに認められる「意味の構造」はどのようなものであるのか。これらが、当面の研究課題、研究対象であり、そのために、言語とシンボル（儀礼、神話、民話、倫

理、法、芸術等）を中心とした幅の広い分野が研究対象となる。

この研究は他のさまざまな研究グループとの間の共同研究として進められなければならない。意味空間論という研究分野を物理空間論ないし生態空間論、また社会空間論と連動させることが必要なのである。意味空間が生態空間や社会空間を越えて成立すること、また時として三者が相互に無関係であることはいうまでもない。しかしそのことはこれら三者の間の生き生きとした対話こそがもっとも求められているのである。このような対話と親密な研究交流を通じて、東南アジアを全体的にみる視座は、東南アジア地域以外の研究者を含めることによってはじめて成立可能となるであろう。

このようにして、東南アジアそれ自体の研究を通して、たんに東南アジアだけでなく、広く人類が生み出してきた「文明と文化」についての原理的な問いかけを行ない、そのいくさきについての思索を深めることを目的とする。

3．平成8年度の研究経過

平成8年度において研究班としては、次のとおり3回の研究会を開催した。

1月26日　第1回研究会「中華・インド文明と内世界」

1．渡来人の世界・日本　　井上満雄（京都産業大学）
　　コメンテーター　　上田正昭（大阪女子大学）
2．渡来人の世界・スマトラ　弘末雅士
　　コメンテーター　　西村重夫
3．現代文明と内世界　　吉田徳夫（関西大学）

1月27日　第2回研究会
「外文明と内世界」研究のまとめ

2月23日　第3回研究会「地域間比較のあり方：東南アジアと日本をめぐって」
（B 03計画研究班との合同研究会）

1．東南アジアから見た日本　高谷好一
　　コメンテーター　　河上倫逸
2．日本研究と地域研究　　園田英弘
　　コメンテーター　　立本成文

「外文明と内世界」研究に関連して、それぞれのメンバーが進めた研究は次のとおりである。

西村は、インドネシアの教育思想を研究テーマとし、それに影響を及ぼしたヨーロッパ文明、インド文明、イスラーム文明とインドネシア固有の教育伝統との相互関係を検討した。3月8日、9日に開かれたシンポジウム「地域研究の未来」では、「総合的地域研究にどこまで迫り得たか：『外文明と内世界』の立場から」を発表した。

河上は、ヨーロッパ近代を研究する場合、ヨーロッパに内在する諸力の解明だけでは不十分であり、大航海時代以降のヨーロッパ列強による世界分割とその歴史的帰結を「発見」され、分割された非ヨーロッパ世界の側からの「近代」の分析も不可欠であるとする問題意識から、「植民地の類型学」を進めた。その典型として、いわゆる「新大陸」とインドネシアを取り上げ、特に後者では、オランダ東インド会社以降の法的植民地支配体制の研究を行なった。併せて、植民地支配体制の解体過程としての第二次世界大戦とその後の戦争裁判の問題点を国際法の枠組みのなかで取り上げ、植民地支配とヨーロッパ近代の構造関連を明らかにしようとした。

白石は、ベトナムの王朝が革命政権によって解体され、吸収されていく過程を儒教的国家との関連によって解釈するとともに、現代ベトナムの政治文化との連続性を明らかにしようとした。

横山は、「内世界」が統合されるにあたり強い媒介の役目を果たすものとして、節用集と大雑書などの日用類書類に焦点を当て、そのはたらきの実際を実証的に調査した。

園田は、日本に関する一連の地域研究である日本人論・日本文化論を題材として、「日本的特色」がどのような論理構造のうえに成立しているかを明らかにしようとした。日本文化論は、日本の文化の特色を日本独自の国民性や社会的性格や日本的制度などで明らかにしようとしているが、そうした枠から脱却する方策を検討した。

弘末は、スマトラ島を事例にして、海域東南アジアがインド文明、中国文明、イスラーム文明、西欧文明などの外文明の影響を繰り返し受けながら固有世界を形成したプロセスを解明しようとした。弘末が1月26日の研究会で発表した研究の概要は次のとおりである。インド洋と南シナ海とを介在し、東西海洋交通路の要衝に位置するスマトラ島には、古くから様々な地域の商人や宗教家達がやって来た。中でも南インド出身者が重要な役割を果たしたことは、従来から指摘されてきた。彼らの活動はチョーラ王国の隆盛した11世紀から特に活発化し、16世紀初めまでのスマトラ島における商業・宗教活動に少なからぬ影響力を行使した。やがて、16世紀中葉以降アチェがスマトラ島北部や中部の沿岸部を勢力下に置き、隆盛し始めると後背地には森林生産物や胡椒、食糧を産出する内陸農業空間が発展を遂げた。前述した南インド

出身者の中には、現地人と混淆しつつ、以前からネットワークを有した内陸部に定着する道を選んだ者も少なからず存在した。彼らは、定住するに際して、港市支配者に対する先住性を主張し、内陸居住民がスマトラ島の正統な「土着先住民」であるという概念の構築に寄与した。ガヨ、バタック、ミナンカバウのいずれの民族の始祖神話においても、当該の内陸民はスマトラ島最初の「土着民」であり、周辺港市支配者は彼ら「土着民」のうちより故郷を離れ沿岸部へ移り、その地の支配者になったと位置付けられた。近世の内陸民族世界（内世界）の形成に、南インド系を初めとする移住者は少なからぬ役割を果たしていると考えられる。

4．研究の成果とフロンティア

第一に、東南アジア地域研究を専門とするメンバーからの「外」と「内」の重層的構造を解明する試みが個別具体的に進められた。弘末によれば、近世スマトラの内世界の形成における南インド系を初めとする移住者の役割の重要性が明らかになった。従来、彼らがスマトラにおけるインド化やイスラーム化において重要な役割を果たしたことが指摘されてきたが、同時に彼らがスマトラ島において現地人と接触、混淆し、内陸部に定住した際に、「土着先住民」という概念の構築に寄与したと考えられる。外文明の導入と内世界の形成とが、彼らの介在を通して同一局面で進行した可能性がある。また、地域世界を形成する媒体としての港市の重要性も明らかになった。港市は、様々な地域の人々を引き付け、コスモポリタンを形成する一方で、内陸後背地住民ともしかるべきネットワークを形成した。このように結果的に「外」と「内」とを設定させる役割を果たした港市の存在は重要となる。その役割は、基本的に近代の植民地体制や国民国家においても継承されていると考えられる。

第二に、日本地域研究およびヨーロッパ地域研究を専門とするメンバーから外文明と内世界の関係をめぐる比較の視座が提示された。横山によると、内世界の統合過程は、前近代の日本の場合、たんなる物や情報の統合というよりも、雅俗意識を核とした多様な礼法のひろまりにささえられた文明化の過程であった、との見方が深まった。その場合、地理的な内外の明確なへだてよりも、雅俗の別のほうが強く意識されがちであり、内世界は雅世界として外世界はその薄まり行く方として考えられた。内外世界を分ける媒介機能をもった日用類書としては、前近代日本の場合は、言語を中心とする世俗儀礼面で節用集が、時令を中心とする宗教儀礼面で大雑書が19世紀末ころまで全国的に重要な機能を果たしていたことの実態が見えてきた。また、南西諸島にあっては、日撰書類が、中国の玉匣記と日本の大雑書の双方を取り組みながら独自の内世界を形成していた様子が見え出した。

5．研究業績（平成８年度発表分）

西村重夫

「タマンシスワ教育理念の連続性と不連続性」『東南アジア研究』34(1): 21-34, 1996.

「東南アジアと日本の教育交流」九州大学教育学部附属比較教育文化研究施設編『教育文化の比較研究』九州大学出版会，pp.213-219, 1996.

河上倫逸

「ロシアの『脅威』とオーストリア東部の社会政策：エールリッヒの場合」『法学論叢』135&136, 1996.

「戦争責任論：エールリッヒの場合」『比較法史学会会報』18-25, 1996.

対談（梅棹忠夫・河上倫逸）「東西を越えた世界市民主義への途」『あうろーら』4:64-90, 1996.

翻訳・監訳（アルノー・バロッティ）『法哲学』以文社，1996.

白石昌也

「『経済発展』と『社会的公平』の二兎を追うベトナム」『世界週報』56-59, 1996.

「日越文化交流の新展開」『ベトナム』1-8, 1996.

横山俊夫

編著（横山俊夫・川那部浩哉・藤井譲治・遊磨正秀）『安定社会の総合研究：ものをつくる・つかう』財団法人京都ゼミナールハウス，1996.

「ことばをなおす・つかう：貞室『かたこと』考」横山俊夫他編『安定社会の総合研究：ものをつくる・つかう』財団法人京都ゼミナールハウス，pp. 23-38, 1996.

弘末雅士

「近世スマトラの内陸民族世界の形成における移住者の役割」『東洋史研究』55(1): 111-143, 1996.

「アジア的社会像」『Nippon Steel Monthly』62: 2-6.